

中心市街地における若者から見た独自性充足型店舗の特徴と変化

愛媛大学 学生会員 ○山本和弥 愛媛大学 正会員 松村暢彦
愛媛大学 正会員 片岡由香

1. 背景と目的

近年、大型チェーン店とは異なり、流行品ではなく店主の嗜好や関心を重視した独自の品揃えを行う店舗が商店街裏などの路地に増加している。地方都市にも、近年そういった小規模で個性のある店舗や古着屋の店舗数が増加傾向にあり、中心市街地にはそのような店舗を目的に訪れる若者が増えてきている。本研究では、そのような独自性が高く、流行に敏感なセンスある若者が自分たちのニーズを満たせるような店舗を「独自性充足型店舗」と呼ぶ。近年、独自性充足型店舗に関する研究では、現代の独自性充足型店舗の経営上の特徴に関する研究、裏通りにおける雑居ビル等では商業集積を維持の実態を明らかにした研究、古着屋店舗の立地特性、こだわりを持った店舗が多く存在する地区の形成過程を明らかにした研究等が蓄積されている。そこで本研究においては、地方都市における独自性充足型店舗の特徴を把握するため、若者の個性（独自性）や店舗の利用実態を把握し、独自性と被服行動、飲食行動の因子との関連を考察することを目的とする。

2. 調査の概要

本研究では松山市をケーススタディ地域として採用した。松山市の中心市街地の地域特性として、愛媛大学や松山大学をはじめ、様々な教育機関が立地していることとあわせて、銀天街や大街道付近の商業地区には若者向けの被服や飲食店舗が集積していることがあげられる。松山市在住の松山大学と愛媛大学に通う大学生を対象に各若者の個性と被服行動や飲食行動、利用店舗との関連を明らかにするために、アンケート調査を実施した。平成 29 年 12 月に大学の講義の時間等を利用して 436 人から回答をえた。アンケート項目は、若者の独自性欲求に関する研究を参考に設定した独自性に関する設問（17 項目）と被服行動の様式の指標化に関する研究を参考した被服行動、飲食行動に関する設問（それぞれ 16 項目）、利用店舗、性別、松山市内の居住年数等の個人属性を設定した。

3. 若者の独自性と被服・飲食行動との関連性

若者の個性（独自性）や被服行動・飲食行動の信念に関する質問に対して因子分析（最尤法・バリマックス回転・固有値 1 以上）を行った。性格や個性の独自性に関して、第 1 因子は他の人に自分のことを認めてもらいたい、他人の評価を気にするか、自分と他人を比較するかといった質問で構成されていることから、「他人の存在を気にするか否か」を表す因子であると解釈できる。第 2 因子は、引っ込み思案であるか、恥ずかしがりやであるか、といった質問で構成されていることから、「自己を積極的に表出するか否か」を表す因子であると解釈できる。被服行動の考え方に関して因子負荷量を値から、第 1 因子は「流行性」、第 2 因子は「適切性」、第 3 因子は「機能性」、第 4 因子は「経済性」を表す因子であると解釈できる。飲食行動についても被服行動と同様に因子負荷量の値から、第 1 因子は「流行性」、第 2 因子は「機能性」、第 3 因子は「適切性」を表す因子であると解釈できる。

因子分析の結果から得られた、独自性尺度における「他者の存在を気にするか否か」と「自己を積極的に表出するか否か」の 2 因子と被服行動尺度における「流行性」「適切性」「機能性」「経済性」の 4 因子、飲食行動尺度における「流行性」「機能性」「適切性」の 3 因子の因子得点を用いて、因子間の相関分析を行った（表 1）。その結果、独自性尺度の「他者因子」は、被服行動尺度の「流行性因子」、「適切性因子」、「経済性因子」、

表 1 因子間の相関分析結果

		他者因子	自己因子
被服行動	流行性	-.121**	.169**
	適切性	-.273**	-.140**
	機能性	.013	-.042
	経済性	-.098*	-.038
飲食行動	流行性	-.088	.129**
	適切性	-.286**	-.055
	機能性	-.045	-.093

** : 1% 有意、* : 5% 有意

飲食行動尺度の「適切性因子」間で有意差が認められた。また独自性尺度の「自己因子」は、被服行動尺度の「流行性因子」、「適切性因子」、飲食行動尺度の「流行性因子」間で有意差が認められた。

4. 若者の分類とその特徴

独自性に関する 2 因子を用いてクラスター分析を行った。分析に際しては、クラスタリング手法として非階層型である K-means 法を用い、クラスターの数を 4、反復回数の上限を 20 と設定した。各クラスターの特徴を明らかにするために、各クラスターと被服行動・飲食行動とのクロス集計を行った(表 2)。クラスター1 の特徴としては、被服行動については、他のクラスターと比べて流行性・経済性を重視するという要素が挙げられる。特に流行性の平均値は全てのカテゴリーで最も数値が高い結果となった。飲食行動

表 2 各クラスターの特徴

クラスター		CL1	CL2	CL3	CL4
度数		112	38	143	143
独自性	他者因子	2.99	5.49	2.98	4.09
	自己因子	4.41	4.70	2.88	3.73
被服行動	流行性	3.27	2.42	2.77	2.84
	適切性	5.22	4.13	5.36	4.72
	機能性	3.93	3.65	4.09	4.10
	経済性	3.30	2.96	3.20	3.16
飲食行動	流行性	3.24	2.34	2.95	3.07
	適切性	3.98	2.99	3.95	3.63
	機能性	3.27	2.86	3.46	3.53

については、他のクラスターと比べて流行性・適切性において全てのクラスターの中で最も数値が高い結果となった。独自性に関するクラスター分析の結果と兼ねて考えると、積極的に自己表出を行い、なおかつ流行性や他者からどう思われるか等の適切性を念頭に置いた上で行われる。ゆえにこのクラスターを「自己顕示型の独自性欲求群」と名づける。クラスター2 の特徴としては、被服行動・飲食行動については全てのカテゴリーが他のクラスターと比べて最も数値が低い結果となった。性格や個性に関するクラスター分析の結果と兼ねて考えると、他者の存在を気にせず、自己を積極的に表出するため、適切性の平均値の数値が低く、他人や流行に関心がないため独自性欲求表出の仕方としては未熟なタイプといえる。ゆえにこのクラスターを「自己中心型の独自性欲求群」と名づける。クラスター3 の特徴としては、被服行動については他のクラスターと比べて適切性や機能性を重視するという要素が挙げられる。飲食行動についても被服行動同様に、他のクラスターと比べて適切性や機能性を重視するという要素が挙げられる。独自性に関するクラスター分析の結果と兼ねて考えると、他者の存在を気にするが自己表出をしない。これは、周囲のことが気になる余り、自己の表出が抑制されているタイプといえる。ゆえにこのクラスターを「抑圧型の独自性欲求群」と名づける。クラスター4 の特徴としては、被服行動については機能性の平均値が全てのカテゴリーで最も数値が高い結果となり、その他の 3 因子については平均的な結果となった。飲食行動についても、機能性の平均値が他のクラスターに比べて最も高い結果となった。独自性に関するクラスター分析の結果と兼ねて考えると、他者の存在を気にせず自己表出もさほどしない。生活するうえで利便性や効率を重視するあまり、周囲との関係性をあまり持とうとしない孤独型のタイプといえる。ゆえにこのクラスターを「孤独型の独自性欲求群」と名づける。

5. 結論

本研究では若者を個性や性格のあり方から分類し、それぞれがどのように被服行動、飲食行動、また利用する店舗と関係を持つのか、独自性充足型店舗はどのような特徴を持つ店舗であるのかについての検討を行った。このような特徴を持つ店舗がより中心市街地や中央商店街に増えれば、独自性の高い若者が街に増え、失われつつある中心市街地の賑わいを取り戻すきっかけや機会が増えることに繋がることを期待される。残された課題としては、アンケート結果から得られた独自性充足型店舗のヒアリング調査や実際に足を運んでの店舗特性調査といった詳しい調査を行う必要があろう。また、現在松山市では、古着屋やセレクトショップの店舗数が増加している傾向があり、そういった店舗の空間変容も把握することが重要であると考えられる。